アブラハムはいつ救われたのか

2016 年　8 月 20 日
西九州伝道所
佐々木正明

　私たちが「救い」という言葉を用いるとき、たいていは新約聖書の文脈でそうします。でも、使徒パウロが信仰による救いという大命題を論じたとき、彼は、アブラハムが義とされたという旧約聖書の記述を引き合いに出して、自分の議論の根拠としました。アブラハムが義とされた、すなわち救われたのは、行いによってではなく、信じたことによるというわけです。そして私たちプロテスタントのクリスチャンは今、このパウロの議論を自分たちの信仰の基盤として立っているのです。

　ところで、しばしば無視されていることですが、ここでパウロは、「キリストを信じる」信仰によって救われるという議論を、なんの説明もなしに、まったく唐突に、「神を信じる信仰」によって救われるという議論に、すり替えていることに注意しておきたいと思います。私たちクリスチャンにとっては、「キリストを信じる信仰」と「神を信じる信仰」はまったくひとつであり、なんの疑問を感じないことですが、果たしてそんなに簡単なことなのでしょうか。少なくてもパウロがローマ人への手紙を書いた時点では、現代の私たちの間のようには簡単でなかったはずです。

　パウロは「信仰」という人間の心の行為に焦点を当てて論じたために、ここでは「誰を」信じるのか、あるいは「何を」信じるのかという信仰の対象と信仰の内容の問題には触れずに、議論を進めています。しかしパウロの時代には、ユダヤ民族はまだ曲がりなりにも国家を持っていましたし、民族としての一体感も強く持っていました。キリストを信じるということと神を信じるということは、必ずしも一つではなかった、同じことではなかったはずです。

　ユダヤ人はほとんど例外なく神を信じていました。パレスチナに在住していたユダヤ人だけではなく、当時の全世界に散在していたディアスポラのユダヤ人も、神を信じていたはずです。しかしキリスト、つまりイエスという人物がキリスであると信じていたユダヤ人は、まだまだ少なかったはずです。彼は異邦人を念頭にこのローマ人への手紙を書いたとしても、事実は、当時の教会の中にはユダヤ人が多数含まれていたし、圧倒的多数のユダヤ人たちは、まだ、イエスなる人物をキリストだと信じてはいなかったはずです。

イエスをキリストと信じていなかったユダヤ人の中にも、敬虔で心から神を崇め、信じていた人々が大勢いたはずです。ディアスポラの中には、キリストとして崇められ始めているイエスという人物について、噂くらいは聞いたことがある人もいたかもしれませんが、その人物について正確な情報を得ていたとは考えられません。そういう人々の中に、アブラハムと同じ性質の信仰を持った人はいなかったのでしょうか。アブラハムの信仰の資質には届かなくても、同じように神を信じている人はいなかったのでしょうか。もしもいたとすると、彼らはその信仰で救われていたのでしょうか。それとも、キリストの福音が届いていなかったために、彼らのアブラハムと同じ性質の信仰は、救いには役に立たないものとされたのでしょうか。

あるいは、パウロが霊感によってこの文章をしたためたとき、まだイエス・キリストのことを知らなかったユダヤ人の中の敬虔な信仰の持ち主は、アブラハムが義とされたように義とされたのでしょうか。聞いたことがない者を信じることはないし、信じたことのない者を呼び求めることもありません。だから私たちは福音を述べ伝えなければなりません。しかし、キリストの救いを語り説明し、信じるように促すことだけが福音の伝達なのでしょうか。

私たちは誰を信じるように勧めるのでしょう。何を信じるように促すのでしょう。千年以上もの間、旧約聖書を通して告知されていた救い主の出現を、今や遅しと待ち望んでいた当時のユダヤ人に向けては、救い主、すなわちキリストの到来とその救いのみ業について語り伝えることが、まさに福音そのものでした。さらに、イエス・キリストはユダヤ人が待ち望んでいた国家的、民族的救い主ではなく、普遍的人類の救い主であるという福音は、絶対に語り告げられなければなりませんでした。キリストの生涯と十字架の贖いの業を語らずに、福音を伝えることは考えられないことだったのです。新約聖書にはそのような意味で、キリストを述べ伝える精神が行き渡っています。

またそのようなユダヤ人の歴史と信仰を背景に育った使徒たちは、異邦人に対しても、同じようなアプローチをしたのも当然です。自分の文化背景を前提に物語を語るのは、極めて自然です。それは人間の歴史の中にたくさん見つけられますし、使徒パウロの議論にも随所に見られるものです。

ただし、パウロの異邦人への福音伝達の方法を垣間見ると、最低限の配慮は試みられていることが分かります。ユダヤ人と異邦人の違いを認めて、異邦人へ向けての福音の語り方になっているからです。とはいえ、それはまだまだ不十分なものだったと言わざるを得ません。アテネにおけるパウロの説教はさすがだと思わせますが、まだまだユダヤ的です。異邦人への配慮が不足しています。また嵐で一冬、三か月間を過ごさなければならなかったマルタ島

では、神のように崇められ大いに尊敬されながら、結局、回心者を出すことはできなかったようです。ディアスポラの一人として異邦人の間に生まれ育ち、異邦人の文化をかなり理解していたパウロでさえ、マルタ島のような完全な異邦人の土地では、福音を伝えるのに非常に苦労したことが想像されます。パウロが行う癒しや奇跡を目の当たりにしながら、また大いにパウロを尊敬しながら、島の人々はパウロの伝える福音を理解しなかったと思われるのです。

果たしてこのとき、パウロはどのような福音の伝え方をしていたのでしょう。十字架につけられて贖いの業を完成されたキリストを語り、このキリストを信じるようにという、定番のやり方だったのでしょうか。アテネでのパウロ説教のアプローチを見ると、どうやらそれに近いものだったのだろうと想像します。もしかすると、キリストの復活と再臨にまで話が及んでいたかもしれません。だとすると、ユダヤ的な神観、信仰観、倫理観などを、全く持ち合わせていなかったこの小さな島の人々にとって、あまりにも難しい福音、理解できない福音であったのではなかろうかと、いまさらながら心配です。

とは言え、パウロだからこそ、ここまでできたのです。パウロだからこそ、神は彼に異邦人の使徒という役割をお与えになったのです。ペテロにもほかの使徒たちにも、とても無理でした。ただし、もしもパウロが、ユダヤ人やユダヤ人改宗者を「おもな」伝道対象としてではなく、初めから完全な異邦人を対象に福音を語っていたならば、パウロのアプローチもかなり異なっていただろうと思われます。

例えば、福音の普遍性の論議でも、福音がユダヤ人から異邦人へ及ぶという言い方ではなく、はじめから、神の救いの福音は全人類を対象としたものであって、ユダヤ人は単に福音をもたらす器として選ばれたに過ぎないと言い、救いに関しては、ユダヤ人と異邦人との間に差別はないというように始まったはずです。全人類の救いという目的遂行の手段として、ユダヤ人が選ばれ、そのユダヤ人を通して救い主が与えられ、その福音がまずユダヤ人に提示されたに過ぎないと説明されたはずです。ただユダヤ人たちが勘違いして、福音は自分たちに与えられたのだと考え、それを独占しようとしたのであって、わたしはその誤りを正して、本来の神の目的を明らかにしようとしているのであると、語ったかもしれません。ただ、ここで、仮定に基づく議論をしても始まりませんので、これ以上はやめましょう。

とにかく、当時の事情がどうであったとか、文化や宗教的背景はというようなことは横においても、パウロは、「キリストを信じる信仰」と「神を信じる信仰」を全く同じものとして取り扱っているのです。パウロが実際どう考えていたかは別として、彼のアブラハムの信仰の議論を延長していくならば、旧約時代の人々は、キリストを信じる信仰によってではなく、神を信じる信仰によって救われたのです。使徒の時代のユダヤ人たちも、神を信じる信

仰によって救われたのです。キリストの福音は素晴らしいものでした。まさに福音だったのです。しかし、キリストは知らなかったけれど神を信じていたユダヤ人たちは、このキリストの福音を聞いて理解して、信じて救われたのではなく、神を信じて救われたのです。

そしてその救いは当然、キリストの贖いの業のゆえに可能だったのです。キリストの贖いなしには、どこにも救いはないのです。神はキリストの十字架のみ業のゆえに、ご自分を信じる者を義とすることができたのです。旧約時代の神の人たち、信仰の人たちは、みなこのようにしてキリストの救いを得たのです。この点を明確にしておかなければなりません。ただし彼らは、キリストを信じたからキリストの救いを得たのではなく、神を信じたからキリストの救いを得たのです。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

では、ブラハムが信仰によって義とされたのは、いつのことだったでしょう。パウロが引用した出来事は、甥のロトの一族が周辺の部族たちに襲撃され連れ去られたのを、アブラハムがダマスコの北まで追撃して奪い返し、その帰り道でサレムの王メルキゼデクの祝福を受け、十分の一をささげたあとのことです。この時まで、アブラハムはずっと神を信じて行動していました。アブラハムが故郷と父の家を出て。カナンの地に向けて出立したのも、神を信じて神の言葉に従ったからです。ロトの救いのために、執拗なまでに神に食い下がって 50 人の義人から 10 人の義人までバーゲンをしたのも、神を信じていたからです。彼は神を信じ崇めていましたので、行くところで祭壇を築きました。時には神に対する信頼が薄くなり、自分の妻を妹だと言ったりもしましたが、基本的に、アブラハムは長い年月にわたって、忠実に神を信じて生きていたのです。（ヘブル 11:8～12）

アブラハムの信仰が義と認められたという出来事は、その出来事にアブラハムの信仰が凝縮して表現されただけのことであって、その時初めて神を信じたのではありません。だとすると、アブラハムが義とされたという事実も、あの時に凝縮されて言われているだけであって、あの瞬間であったと言い切るのは困難になります。実際のところ、いつ悔い改めて信仰を持ったのか、いつ神の救いを受けたのかなどと詮索するのは、半分ユダヤ化した欧米キリスト教文化を前提とした、救いの理解、悔い改めの理解あるいは体験であって、多くの場合、私たち完全な異邦人のものではありません。神を信じるということは瞬間のできごとでもあり得る一方、長い時間の経過の中での特定しがたい時の出来事だとも、考えられるのです。

さらに、アブラハムはどのような神を信じたのでしょう。三位一体の神ではなかったはずです。「ありてあるもの」である神でも、天地創造の神でもなかったと思います。アブラハ

ムの知的な意味での神理解は、聖書を持ち神学書を積み重ねて論じることができる、現代人である私たちよりも相当劣ることでしょう。アブラハムの神理解は、神との出会い、神との付き合いの中で生まれた体験的な知識であり、多くの礼拝対象者の中で、彼が最も信頼を置くことができる、また、敬い礼拝することができる存在だったにすぎなかったはずです。今の私たちのように、神は唯一絶対の存在者であるなどという感覚はなかったはずです。アブラハムはそのような知識もないのに、神に対する信頼のゆえに義とされたのです。パウロ、が信仰と呼ぶものは、知的理解を先行させた信仰ではなく、出会いと付き合いという体験による信頼なのです。

さらに面白いことは、パウロは全く沈黙しているのですが、この時のアブラハムはユダヤ人ではなかったという事実です。アブラハムはユダヤ人の先祖ではありましたがユダヤ人ではなかったのです。彼はまだ割礼を受けておらず、律法も与えられていませんでした。アブラハムの子孫たちがいつの時点でユダヤ人という選民となったのか、厳密に断言するのは困難ですが、アブラハムの救いは、ユダヤ人として、律法の適用を受けている中で起こった出来事ではありません。むしろ、異邦人の救いに通じるところが大きいのです。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

シュメール文化の中で生まれ育ったアブラハムは、生まれながらに天地の創造者である神を礼拝していたはずがありません。故郷を捨て、父の家を出て、カナンに向けて出立するように言われる前から、たぶん、父がまだ存命中から、アブラハムは神に知られ、アブラハムも神に気付き始めていたことでしょう。全くの想像ですが、アブラハムの性格、宗教感覚、礼拝態度、物事の判断基準、倫理観などを総合して、神は多くの人間の中からアブラハムを人類の救済に役立つ者としてお選びになり、彼にご自分を現して教え導き、ご自分の選民の先祖としようとなさったのでしょう。アブラハムはアブラハムで、自分に現れてくださるこの方を自分が礼拝する神と定め、このお方に忠実に従おうという心を持ったのでしょう。

アブラハムがそのような宗教意識をもち、目に見えないお方を礼拝する心を持っていたのは、彼も、神に似せて造られた人間の一人だったからです。人間は生まれながらに霊的な存在である神を感じ、その存在を思う心を持っています。神に似せて霊的な存在として作られているからです。神を感じ、神を思う心を持つということが人間の本能であり、その本能こそまさに人間が人間である印です。すべての動物の中で神を認識できるのは、神に似せて造られた人間だけであり、神との交わり、交流、語り合いを持つのが、ほかの被造物と異なる人間の使命であり価値なのです。

では、アブラハムのようなまじめな宗教心、高い倫理観をもって高尚な生き方を求めてい

る人は、ほかにいないのでしょうか。もちろん選民であるユダヤ人の中にはいたことでしょう。しかし、異邦人たちの間にはいないのでしょうか。私たち日本人の間にはいないのでしょうか。クリスチャンではない多くの人々の中に、そのような人物はいないのでしょうか。日本の歴史を少し学んだだけで、非常にまじめな宗教観を持ち、高い倫理を持って人の生き方を尋ねた人たちはたくさんいます。神の愛に似せて造られたことを象徴するような生き方をした人たちも数多くいます。キリスト教は嫌いだけれど、ほかの人の幸せのために自自分を捨て、あらゆる困難に甘んじ、命さえ投げ出して働いている人たちも少なくありません。彼らは伝統的な権威のキリスト教は嫌いでも、自分の中にある本能的宗教心と良心に従って行動しているのです。人間としての本分に従って生きたのです。

　このような人々は、キリストを救い主として受け入れていないために、永遠の裁きに落とされるのでしょうか。単に、教会が怠け者で、自分たちの利益のために目がくらみ、福音宣教をおざなりにしてきたために、キリストの福音を聞く機会を奪われたということのために、火と硫黄の池に突き落とされるのでしょうか。堕落してあまりにも醜い教会の姿に失望し、自分の良心と宗教心に従って、命を投げ出して福祉や人命救助に当たった人たちも、うじと火の消えないゲヘナに、投げ込まれるのでしょうか。

　キリストを信じる以外に、救いはあり得ないのでしょうか。聖書によるならば、キリスト以外に救い主はいません。キリスト以外に救いはないのです。だから、キリストに信頼するのが道です。だからこそわたしたちは、キリストによる無代価の救いを、福音として語り伝えなければならないのです。キリストを信じるならば誰でも救われるのです。それが聖書の教えです。でも、キリストを信じなければ救われないのでしょうか。救われないと断定する根拠は、どこにあるのでしょうか。

　アブラハムはキリストを信じていませんでした。ユダヤ人でもありませんでした。アブラハムが十一をささげたメルキセデクはどうだったでしょう。ヨブはユダヤ人だったのでしょうか。イエス様の誕生に当たって新しい王はどこにいますかと、東方から訪ねてきた占い師たちはどうでしょう。彼らはユダヤ人ではなくても、まじめな宗教心を持って星を調べ、多くの書物をあさり、メシヤのことを探り当てたのでしょうか。彼らが救い主の誕生を祝う人に加えられたのは、何という光栄だったことでしょう。あの人たちはどうしてそのような光栄に浴することができたのでしょう。

　イエス・キリストを信じて救われるのが、神が定めた順当な救いの道です。そのために、キリストの福音を述べ伝える役割が教会に与えられています。しかし神は、その道以外にも、人が救われる道を残しておられると考えてもよいのです。神の権威と自由の中でされることです。より多くの人々が、キリストを信じることができるように、キリストの福音を述べ

伝えましょう。でも、たとえキリストを信じる機会がなかった人にも、神は救いを準備しておられます。それは神を信じることによって得られるものです。神はキリストが成し遂げられた贖い業のゆえに、ご自分を信頼し、崇める人々救うことができるのです。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

誤解してはなりません。繰り返しますが、キリストなしに救いはあり得ないのです。だから、キリストは大切なのです。福音の中心なのです。天地の創造者である神と、この神に約束されていた救い主キリストの到来を待ち望むことは、ユダヤ人には当然の宗教的前提でした。ところが、日本人のような異邦人には、このような前提はないのです。長いキリスト教文化に育てられた欧米人たちにとって、キリスト教の神を信じるというのは文化的に受け入れられることであり、キリストを信じるということにも違和感はありません。ところが、日本人がキリスト教の神を信じるというのは、文化的に受け入れられず、キリストを信じるということに激しい違和感を持つのです。

伝統的なキリスト教の影響が強い西欧の文化に生きるクリスチャンは、自分たちこそ本物のユダヤ人、霊的なユダヤ人、神の選民であると感じています。たとえ、学問的には自分たちは異邦人であると理解していても、信仰的に、自分たちは異邦人だと感じていないのです。ユダヤ人に対する祝福は自分たちが受け継ぐのだと思っています。いわゆる置換神学に近い感覚を持っているのです。

ですから彼らは、自分たちこそ神の祝福を受ける人々であり、自分たちが作り売り出す文化こそ神に喜ばれる文化であると思い込みがちです。それはパウロが語っていた普遍的福音の神学を、自分たちに都合よく解釈して、自分たちの文化や生活に適応させられた神学を作り上げることにつながりました。

その信仰を神は義と認めたということを、信仰によって義とされた、すなわち救われたということの用いて言います。信仰によって義とされた。救われた。
キリストをしんじる信仰ではなく、神を信じる信仰
アブラハムはいつ神を信じたのか。カランを出たとき。

どのような神を信じたのか。神をどのように信じたのか。
アブラハムが抱いていた神の概念。　月の神。　リベカの家族、ラケルの偶像

日本人はいつ救われるか
キリストを信じたとき？
神を信じたとき？
どのような神を信じたとき？
どのように信じたとき？